

日本の歴史と中国の歴史の相違点

歴史とは何をもって歴史と言えるのか、それを考えた時、何処の国にも歴史には神話の部分があります。神話はその神話が語られていた時代よれも、ずっと後になってから記録されるのが普通です、何故神話を記録する必要があったのか？

そのわけは、その国の成り立ちやその背景、そして政治情勢を考慮しなければ成らなかったからです。日本の場合は（記・紀）の中にその神話を記述する部分があり、国家及び皇室の起源を示す為に構成されたものでした。なので記録された時点では、皇室や国家の起源を示す目的があり、尚且つ必要であったと言う事なので、ハッキリした目的を持って構成されたものでした。かなり首尾一貫した体系を持っていた、と言えると思います。それが記録された後になつて、内容が納得いかないと言っても、いわば皇室の中の出来事で記録された時点において第二、第三の政権が同時期に存在するような事は有り得ない事なのです！

よく言われる事で歴史は勝者が創るものなのです。

この様な事を考慮して、日本に一番近くて、大きな国、中国の神話と歴史を通して、日本との違いを見て、みたいと思います。

中国の神話は首尾一貫せず、同種の物の重複が有り断片的な物の集合に過ぎない、体系を欠く神話であると言う人も居るようですが、それは何と言っても、日本とは比較に成らない程、広大な国です、ですから中国の歴史は各地に同時期に政権が並立して、それぞれの国に建国説が出来、それらの地域政権は絶えず興亡を繰り返してきました、その度に神話は没落し何かの拍子に没落を免れ

た一部が地上に残される、神話は歴史を反映するものですが、全面的ではなく断片的な物に、なっ
てしまいます、なので中国の神話から歴史を求めるのは難しいとも、言われています。

その点日本の神話は国家の統一がある程度固まり、それに時代は八世紀になっていましたから、虚
構工作の組織性が高いのは、必然的だと思います。「日本書紀」

中国の歴史は三皇、五帝から始まりますが、司馬遷の書いた「史記」の中では、五帝本紀から
始めて、三皇を歴史とは認めて居ません。五帝とは黄帝、センギョク、帝コク、堯、舜、です。司
馬遷の時代でさえ、黄帝はまだ認められていなかったようです。黄帝を古代史上実在の人物として
考える人は、神武天皇を実在の人物として考える人と同じような事で、黄帝は伝説上の人物だった
としても、その中に、古代帝王の誰かが投影されて居るのです、神武天皇が実在しなかった、とし
ても大和朝廷の祖先に、神武天皇に投影される人が居ても、否定できない事と同じです。

ここで司馬遷の「史記」の記述を通して、中国の歴史と日本の歴史の相違点を見て、みたいと思
います。「史記」の基本的な構成は、本紀が十二篇、書が八篇、表が十篇、世家が、三十篇、列伝が
七十篇、の順で、組み立てられています。そして本紀の中身は、五帝、夏、殷、周、秦、秦始皇、
項羽、漢高祖、呂后、漢の文帝、景帝、武帝、の記述が有り又、その中の、五帝本紀と夏本紀が神
話の時代に当たるようです。次の殷、本紀ですが、司馬遷が「史記」を書き出した時点では、まだ
殷墟は発掘されていませんので、実在性は疑われていました、しかし殷墟が発掘され、羅振玉

(1866~1940)「殷商貞卜文字改」の発表により、司馬遷が「史記」の中で書いていた、殷の年代
記と、ピッタリ合致したのです、殷は今から 3800 年、前頃には滅亡した国です、数千年前の出来
事が地上に出て来たのです。日本の発掘では太安万侶の墓が見つかり、実在が証明されました。も

ちろん、日本と中国の発掘の違いは、湿った土地と乾いた土地の差が大きな結果として 現れるのは、当然ですが。次に列伝は七十篇あり内容は、人間の实在性を描き取る、この列伝は司馬遷が得意分野だったようです。「春秋」や「戦国策」と言った先行の歴史書にも無く、歴史を考える中でも人間主義の歴史観その人、だったようです。戦後日本の史学者の中にも（歴史の事実を知識として受け取る事は、大切な事ではあるが、道徳的な見方も、美的な見方も、無くてはならない、要素である）と説く、学者も居ました。私も同感です。

しかし唐の時代の司馬貞は伏羲、女媧、神農、を三皇とし他に天皇、地皇、人皇を指すと言う説を紹介しています、三皇の中の神農は日本でも知名度が高く、農業の神様とされ、鋤や鍬を造りその用法を教えたり、百薬を舐めて医薬を見つけ、医薬や易者の神でもありました。日本では薬屋さんは神農を祀って来ました、大阪の薬問屋街の道修町では、神農は守護神として、祀られています。

また「史記」の列伝で非暴力主義の伯夷と叔斉の伝を載せています、周の武王が武力により、殷を討とうとした時、伯夷と叔斉は反対しました「史記」は伯夷と叔斉を孤竹の子としています、孤は狐をトーテムとした部族のようです、日本でも狐を使者とする稲荷は、農業の神様です。中国では兎が結婚する時、狐が現れたと、言う伝説が有り男女の交合は繁殖に繋がり農業の豊作を祈る時、狐が連想され稲荷信仰となったようです。日本の稲荷信仰は、山城の渡来系豪族の秦氏が、持ち込んだものでした。

五帝の一人、堯が帝で舜が摂政の時、一、 共工を幽陵に流して北狄に変え

二、 驩兜を嵩山に追放して南蛮に変え

三、 三苗を三危に遷して西戎に変え

四、 鯨を羽山に幽閉して東夷に変え

この事が中国の「四夷観」の始まりだったのです、狄、蛮、戒、夷、は中原から見て辺境ですけど、始めから辺境にいた訳ではなく、追放されて辺境に行ったようです。次に 傅斯年（^{ふしねん}1895～1950）の書いた「夷夏東西説」では黄河流域は確かに中国文化のふるさとですが、それは一ヶ所ではなく東西に異質の文化が、興ったとする説です、1921年スエーデンの考古学者が河南省ヤンシャオ文化の、遺跡を発掘した時、彩陶が出土し、その文化をヤンシャオ文化と呼び1930年から翌年にかけて、山東省竜山鎮の城子崖遺跡の発掘調査を行い、黒陶を特徴とする文化の存在が、明らかに成り、これが竜山文化となりました。河南省のヤンシャオ村は洛陽市と三門峽との、中間に有り「夷夏東西説」は、それぞれ夷族と夏族のものとみなしたので、黄河流域の古代史はこの両族の、接触によって繰り広げられたと、考えられたのです。これは、三皇、五帝、夏、殷、周と、縦の系譜を追って研究されてきたものを、横に広げた功績があるようです、竜山文化はヤンシャオ文化を継承したもので。日本における、縄文から弥生時代にと、継承されて行った事と、似ているのではないのでしょうか。それではヤンシャオ文化的な生活様式を、竜山的なそれに、変えさせたのは、何だったのででしょうか、ヤンシャオ人も農耕を知っていましたが画期的な技術革新が起こり、それが黄河流域の東の方に移動した、夷と呼ばれる土地です、中国は広大な土地なので各地に個性に富んだ、様ような文化が芽生えるのは当然だったと言う事です、考古学者の鄭徳坤（1907）によれば、初期新石器時代までに中国には北と南に二つの文化が、有りそれが黄河中流域で混じり合い北方のそれは、乾燥地帯の細石器文化であり、南方のそれは森林地帯の砂礫文化でした、この二つの文化は共存しお互いに影響して、新しい文化に移ったと言う

のです、新しい文化とはヤンシャオのそれであり竜山文化がそれに続き、殷王朝を興した小屯文化によって最終的に交代したと、言うのが鄭徳坤が記す、中国における歴史時代の勃興は数千年に渡る、文化混合の結果であったと記しています。殷の国号は商でした盤康が殷と呼ばれる地方に遷都してから、殷となり王朝自体は最初の封地での商でした殷は農耕や牧畜の他にも、交易も始めており商人という言葉はこの時代から、使われだしたようです。次は周の時代は后禘から続く古い国ですが、天命を受けて天子となったのは、文王の時代からでしたのでまだ新しいと言う意味での、維新という言葉が、日本では明治維新の維新として、使われて居るようです。又周の時代の爵位

(公、侯、伯、子、男、)も明治政府が採用したようです。又周の時代成王から次の庚王の時代にかけて、最も安定していたようです、四十年以上に渡り刑罰は用いられなかったと「史記」は書いています。王国維(1877~1927)中国文化の源流は周にあるとして、殷の文化は後代の中国に伝わらなかったと、していますが周代の生活の詳細は、殷代のそれより分かりにくい面もあり、その理由は周人は殷人の様に、卜辞を残してくれなかった又、王国維は「殷、周、制度論」の中で殷と周の制度が最も異なったのは、「立子立嫡の制度論」と「同性不性不婚の制」であつたと述べ、この事がその後の中国での基本的なモラルの、源に成ったようです、

これまで、中国の歴史を通して、日本の歴史との、接点を探って見ました「史記」の中のほんの一部ですが私の独断と偏見で、次の様にまとめて、見ました。

歴史は一回きりかも知れませんがパターンは繰り返す、意見の食い違いは、話し合いで調整出来ませんが、勢力争いはそうは行かない、問題が起きた時、前例に倣ってから事を進める、その一つの例が万里の長城です、この壁を越えて来たら、痛い目に合うぞと、言う意味で今現在アメリカと核、

競争していますがアメリカに負けない核を作っても、意味がないのでは？他の国の歴史を学ぶ事で、日本の歴史の取組方を思考しています。

ID 10389 黒岩 伸一

※この記事は、論文ではありません。会員の方々に読んで頂きたく、何かのヒントになればと思いい書きました。